

越後田舎体験

1 事業の概要

上越市の海・山・大地の豊かな自然や農山漁村の地域資源とそこに生きる人々の暮らしをいかした体験型観光を推進することで、交流を通じた地域の活性化を目指しています。

上越市と十日町市とで連携して取り組む越後田舎体験は、平成11年から教育旅行を受け入れており、この間約79,000人、年間では、40団体以上、約4,000人の児童、生徒が訪れています。

その地域に暮らす人々と、訪れた人々の双方が感動できるような体験があつて初めて、人は高めあうことができると考え、「ほんものの体験」を受け入れの基本理念としています。

2 民泊・農山漁村体験学習の意義

(1) 子どもたちへの効果

①豊かな人間性や社会性、コミュニケーション能力が高まります

農山漁村の人々との交流やふれあいによって、互いを尊重する人間関係のあり方を学ぶ機会となる

作業の達成感を味わい、勤労の尊さを学べる

②農山漁村の生活や文化、産業などへの興味・関心、学習意欲が向上します

異なる風土や自然、人々の生活、伝承文化、農林水産業などに直接触れて、農山漁村に対して親しみが持てる

③体験を通じて問題発見能力や問題解決能力が育まれます

調べ学習や農林水産業の作業を通して、自ら進んで学習し問題解決を試みるなど、実践的な学習方法が身につく

(2) 受け入れ地域における効果

【人の活性化】

①体験活動を楽しむ子どもに刺激を受け、農林水産業の担い手としての自信と元気が得られます

農業体験の受け入れや稲作指導は、農業本来の喜びやものづくりの感動を再認識するよい機会

②受け入れ家族のなかでコミュニケーションが増え、日常生活に活気を与えてくれます
宿泊客を受け入れることによって、家族それぞれに役割分担ができるなど話題も豊富に

③地域の人材発掘にもつながっています

そば打ち名人、縄ない名人、物語の語り部など、地域住民の知恵や技術が発揮され、地域活性化につながる

【地域の活性化】

④地域に賑わいが生れます

少子化の進んだ地域にも子ども達の楽しげな声が響き、いっそう賑やかに

⑤地域資源を見直す機会です

体験活動のメニューづくりの過程で、子ども達に伝えたい、自慢の郷土食や自然環境等を再発見

⑥経済的な効果もあります

消費者（子ども達とその家族）と顔の見えるつきあいができ、農産物の販売方法にも好影響

宿泊者が増える宿や体験活動の指導料という副収入を得る農家も

⑦まちの知名度があがります

遠方の地域の住民にも、地域の名前を知ってもらえる PR に

注) 農林水産省「学校教育で子ども達に農産漁村体験を！」*をもとに観光振興課作成

*<http://www.maff.go.jp/j/nousin/nouson/gakkou/>

3 民泊（農村生活体験）とは

(1) 目的

①人と人とのふれあいを大切にします

・お互いに思いやる心、信じあう心を伝えます

②農村で暮らす人々の暮らしを知っていただきます

・農村の様子・暮らし・地域の歴史、農林漁業の現状を伝えます

(2) 内容

①子どもとの接し方

交流とコミュニケーションが目的です。

お客様扱いはせず、家族と一員として接します。

食事づくりや、家庭での作業について、しっかり話しをしてあげながら、一緒に取り組んでください。

子どもたちは学びに来ています。喜ばせよう、楽しませよう、いい思い出を作ってあげよう、という“おもてなし”をする必要はありません。

②受け入れ期間

民家に概ね1泊します。

③受け入れ人数

3～5名を基本とします。

④食事

受け入れ家庭で一緒にとります。食事の用意・片づけも子どもたちと一緒にいきます。

メニューは、ご家庭の普段の献立がいちばんです。

地域の食材を使った煮物、和え物、酢の物、炒め物、天ぷらなど、都会では食べられないメニューが田舎体験のご馳走です。

⑤農村生活体験

それぞれの民家で、その家の作業を手伝ったり、散歩したり、語り合ったりして過ごします。

⑥経費

宿泊・食事にかかる経費をお支払いします。

受け入れ内容によりますが、中学生1人あたり約5,000円です。

4 ご相談いただいた後の流れ

ご相談

↓

事業説明

↓

受け入れの様子の見学

↓

研修（衛生管理研修、安全管理研修など）

↓

受け入れ

5 民泊家庭、体験インストラクターの声

(民泊家庭の思い)

- ・我が家に来る子どもたちを孫のように思い、接している。自分は歳をとったが、動ける限り受け入れを続けていきたい。
- ・夫婦で受け入れを続けてきたが3年前に夫が亡くなり、受け入れをやめようか迷っていた。1人で受け入れしてみたところ、子どもたちと一緒に作業することで、問題なく、楽しく過ごすことができた。今後も続けていきたいと思う。
- ・子どもたちと触れ合っていると気持ちも若々しくいられる。
- ・時間があっという間に過ぎる。もっと子どもたちと一緒に過ごせる時間が長ければ良い。
- ・自分の子たちが巣立ってしまっているのが、たまに賑やかになると気がまぎれる。近所の人たちも協力してくれるので対応しやすい。
- ・私は、わが子と同年代の子どもたちを受け入れることは、わが子にとってもプラスになるのでは、と考え自分が30代半ばの頃、民泊受け入れを始めた。
最初はわが子と受け入れる子どもたちとの間に少し距離はあるが、すぐに打ち解けて一緒に遊んだり、話したりと楽しいひとときを過ごしている。
見ず知らずの子どもたちを自分の家に泊めることは、安全面や健康面など、心配りすることもあるが、都会の子どもたちとの交流はわが子にとってもよい意味で刺激になっていると実感している。いつの頃からか、わが子の方から「今度はいつ来るの？何年生？」と聞くようになった。
若い世代の方も、受け入れをためらっておられる方は、まずは一度受け入れてみてはいかがでしょうか。
- ・収入を目的としているわけではないが、受入料金が収入としてあるのは、ちょっとしたお小遣いになるので嬉しい。
- ・民泊家庭の仲間と一緒に研修や懇親会も楽しみのひとつになっている。

(受け入れ時の様子)

- ・大根の種まきを一緒に行ったが、種がとても小さいことや何で種が赤いのか質問もあった。普段食べている野菜がどうやって植えられて、成長していくのか考えてくれた様子だった。

- ・今年、初めて受け入れを行った。自分の子や孫を田んぼや畑に連れていったことはなかったが、受け入れた子どもたちは山や畑での虫取りや農作業などにとっても喜んでいた様子だった。今度は、自分の孫も山や畑に連れて行ってあげようと思う。
- ・中学生と一緒に「こけ玉」を作った。子どもたちは初めて挑戦したが、とてもよいできばえで、自分の作品をお土産に持って帰っていった。また、我が家には田んぼや畑がないので、近所の方にお願ひし、じゃがいもの畝を1列掘り起こさずにとっておいてもらい、中学生と一緒に掘り起こして、夕食のおかずにした。田んぼや畑がなくても、工夫しだい。
- ・子どもたちと一緒に薪割りをして、薪を積み上げる作業を行った。子どもたちは初めての体験にとっても興味を示して、一生懸命手伝ってくれた。
- ・雨が降り、家で紙芝居を行った。子どもたちは紙芝居がめずらしかつたらしく、とても熱心に聞いてくれた。
- ・自分で収穫した野菜を食べて、野菜嫌いを解消できた子どもがいる。本人や親から感謝の連絡があった。
- ・春に小田小学校の児童約100人の田植え体験を集落で引き受けた。集落には100人が田植えできる大きな田んぼはないため、となり合わせの2枚の田んぼを使って田植えを行った。集落の皆さんも自分の家の田植え作業で忙しい中、協力していただいた。
- ・毎回違う子どもが来るので、食事メニューはずっと同じもので対応している。

(受け入れ後の交流)

- ・畑仕事の手伝いだけでも自宅では体験できない経験ができたこと、保護者からも感謝の手紙が届いている。
- ・手紙や年賀状のやり取りが数年来続いている。生徒からは今では“新潟の伯父さん”と呼ばれている。
- ・「高校受験に合格したよ」などと節目ごとに電話をくれる子どもがいる。親戚が増えたように感じる。
- ・田植えや稲刈り体験を行った子どもたちには、学校を通してお米を送ることになっているが、うちのお米が美味しいからと、受け入れた子どものお宅だけでなく、その知人の方からも毎年注文がある。